

TOMODACHI J&J  
災害看護研修プログラム  
2021



**TOMO  
DACHI**

*Johnson & Johnson*  
FAMILY OF COMPANIES IN JAPAN

# 非常事態に 対応できる リーダーへ。

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」は、今回が6度目の開催。  
2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で中止され、  
今年度はすべてオンライン上で実施しました。  
コロナ禍の今だからこそ、非常事態に対応できるリーダーを育成する。  
それが、私たちの使命だと考えています。

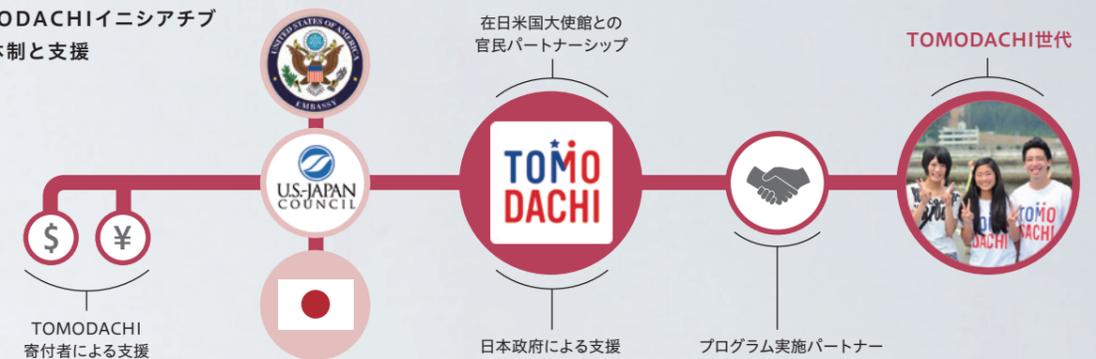


## TOMODACHIイニシアチブとは？

東日本大震災後の復興支援から生まれ、教育、文化交流、リーダーシップといったプログラムを通して、日米の次世代のリーダーの育成を目指す米日カウンシルと在日米国大使館が主導する官民パートナーシップで、日本国政府の支援も受けています。日米関係の強化に深く関わり、互いの文化や国を理解し、より協動的で繁栄した安全な世界への貢献と、そうした世界での成功に必要な、世界中で通用する技能と国際的な視点を備えた日米の若いリーダーである「TOMODACHI世代」の育成を目指しています。

詳細は、TOMODACHIイニシアチブのウェブサイト(www.tomodachi.org)をご覧ください。

### TOMODACHIイニシアチブ 組織体制と支援



## プログラムを支えるのは、確かな実績を持つスタッフ



橋本 彩  
プログラムディレクター  
TOMODACHIイニシアチブ

### PROFILE

前職は在日米軍に勤務し、2011年のトモダチ作戦では、後方支援の調整員として参加。日本と米国の官民両方の組織にて20年勤務し、司令官や社長などのトップマネジメントに直接仕えるポジションを経験しており、現職でも活躍を続ける。高校生、大学生、そしてヤングプロフェッショナルを対象としたTOMODACHIイニシアチブのプログラムを管理、運営している。



渡部 奈々  
プログラムコーディネーター  
TOMODACHIイニシアチブ

### PROFILE

茨城県出身、津田塾大学卒。米国ノースカロライナ州に2年間派遣され、草の根交流プログラムに参加した経験を持つ。現在は、TOMODACHIイニシアチブのプログラムコーディネーターとしてプログラムの運営に携わっている。

## CONTENTS

02	TOMODACHI イニシアチブとは？	10	プログラム紹介	18	修了後も続く学び
03	プログラムの全体像	11	事前研修	21	関係者紹介
05	参加者紹介	13	米国研修	22	協賛
09	メンター紹介	15	事後研修	23	心に残った言葉たち
		17	最終報告会		

# 災害看護研修プログラムの全体像

東日本大震災では多くの医療機関が被災し、特に医療過疎が指摘されていた東北地方沿岸部では、状況がさらに悪化しました。この経験から、住民の近くで寄り添う看護従事者を育成・教育することは地域復興への貢献につながると考え、東北大学で地域医療に携わる菅原準一教授の協力のもと教育支援を計画。2015年に「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」としてスタートしました。

本プログラムは、災害対策分野の専門知識の深化と次世代を担うリーダー育成を目的とし、事前研修・米国研修・事後研修の3つで構成されています。事後研修内で行われる報告会では、看護学生や災害医療従事者、その他災害看護に関心を寄せる方たちに対して、参加学生たちが学んだことを共有しています。

## 選考

2021年6月30日(水) ▶ 7月16日(金)

災害看護やメンタルヘルスケアなどに関心を持つ看護学生を募集し、プログラムに参加する8名のメンバーと2名のメンターを決定しました。



STEP 0

## 事前研修

- ① 2021年10月23日(土)・24日(日)
- ② 2021年11月13日(土)・14日(日)
- ③ 2021年12月11日(土)・12日(日)

米国研修に向けて、災害看護の基礎をオンライン上で学びました。また、石巻十字病院へのオンライン訪問や、東日本大震災を経験した語り部の方からの講義を通して、震災への理解を深めました。



STEP 1

## 米国研修

- ① 2022年2月14日(月) ▶ 18日(金)
- ② 2022年2月22日(火) ▶ 25日(金)

アメリカの災害看護の実態や、新型コロナウイルスによる医療への影響について学習。現地で活躍する医師や看護師から話を聞き、日米の共通点と違いについて考えました。



STEP 2

## 事後研修

2022年3月5日(土)・6日(日)

兵庫県立大学 地域ケア開発研究所の増野園恵先生による研修を行いました。また、プログラム全体を通して参加者が個人プロジェクトを実施。学んだことを地域や大学に還元しました。



STEP 3

## 最終報告会

2022年3月27日(日)

半年間のプログラムで学んだことを、災害看護に興味がある人に向けて発表しました。後半はメンターによるパネルディスカッションも開催し、災害看護の未来について語りました。

## 2021年度の 変更 POINT

### 対面を避けオンラインで実施



対面で行っていた内容を、すべてオンラインに切り替えました。VRを使用したトリアージ訓練など最新技術も活用し、オンラインでもわかりやすい内容となるよう工夫しています。

### コロナ禍による影響も学習



これまでと同様、災害看護について扱いつつ、今回は新型コロナウイルス感染症に関する内容も追加。未曾有の事態に対応する看護師自身へのケアの重要性をより深く学びました。

# 参加者紹介

2021年度は、災害看護やメンタルヘルスケアなどに関心がある8名の看護学生が全国から参加しました。プログラムに参加した理由や目標、普段の学校生活の様子をご紹介します。

## 参加の目標

挑戦する姿勢を持ち、災害看護に対する理解を深める

### Q<sup>1</sup> 参加した理由は何ですか？

1つめは、将来、国際看護師として海外の災害現場で活躍したいからです。自然災害や戦争、大事故など医療を必要としている緊急の現場で、瞬時に医療を提供できれば、「防ぎえた死」を最小限にすることができます。2つめは、このプログラムが学外で災害看護を学ぶ最高の機会だと思うからです。他の救急の研修会や講習会は、コロナ禍で募集中止となっていました。本プログラムがあることを聞き、ぜひ参加したいと思いました。

#### 学校でのわたし

大学で「国際看護学」という講義を履修し、多様性や異文化理解など、プログラムを通して学んだことを生かしながら、日々勉強に励んでいます！



### Q<sup>2</sup> なぜこの目標にしましたか？

失敗を恐れずにかんがりたいたいと思ったからです。また、研修で学んだことを自分でさらに深掘りできるように学びたいと思いました。

旭 峻さん 長岡崇徳大学 看護学部看護学科3年 / 新潟県三条市出身

## 参加の目標

災害の特徴を踏まえ、体+メンタルヘルスの支援を学ぶ

### Q<sup>1</sup> 参加した理由は何ですか？

東日本大震災等でボランティア活動をした父の話聞き、日常生活が一瞬で非日常に変わる怖さを感じました。また、急激に状況が変わる災害において、身体と精神、両側面の安全・安寧に貢献できる医療者になりたいと思ったことが、災害看護に興味を持ったきっかけです。米国の災害や災害医療を学び、日本と異なる点や共通点を見出し、今後の災害医療・看護に関して取り入れるべき点について検討したいと思いました。

#### 学校でのわたし

4年次では、「災害看護」という授業を選択し、卒業研究ではコロナ禍における在宅医療への影響をテーマに文献検討を行いました。



### Q<sup>2</sup> なぜこの目標にしましたか？

被災者や支援者の話を聞き、サポート方法を考えたいと思いました。米国研修でメンタルヘルスを学び、支援について考えたいです。

隈本 真有さん 佐賀大学 医学部看護学科4年 / 佐賀県唐津市出身

## 参加の目標

支援者支援を学び、メンバーと学びを深め、周囲に還元

### Q<sup>1</sup> 参加した理由は何ですか？

家族の被災体験を聞いていたので、幼い頃から災害や災害医療に関心がありました。また、東日本大震災発生時はテレビの前で見ているしかなく、被災地で貢献したいと思いました。大学卒業後は看護師として救命救急センターに勤務し、新型コロナウイルス感染症にも対応しました。幅広い視点を持って対応するためには、多様な災害における現状や課題、現場のニーズ、国内外での災害医療の取り組みを学ぶ必要があると思い応募しました。

#### 学校でのわたし

大学院の授業で健康危機管理や災害保健活動について学んでいます。実際に地区踏査を行い、地区の特徴や防災対策等を学ぶことができ、とても興味深かったです。



### Q<sup>2</sup> なぜこの目標にしましたか？

セルフケアを学べると聞き、興味を持ちました。また、参加者同士で積極的に話し合い、関係性をつくりたいと思ったからです。

木田 千景さん 聖路加国際大学大学院 看護学専攻1年 / 東京都大田区出身

## 参加の目標

①自信を持って発言 ②被災者の力を引き出す支援を学ぶ

### Q<sup>1</sup> 参加した理由は何ですか？

私が災害看護に興味をもったきっかけは、西日本豪雨災害です。自分のよく知る地域が被害を受けているのに、何もできず悔しく感じました。同時に、ニュースなどを通じて知る救護班の活動に感銘を受け、私も被災者の力になりたいと考えました。災害医療に携わり、被災者の心も含めて支えとなるような看護師になりたいです。今回のプログラムでは、コロナ禍や米国の災害医療など、幅広い知識を身につけられると思い参加しました。

#### 学校でのわたし

選択科目の「国際看護学」は、国際救援だけでなく海外の災害時のこと、そして国内の災害時の外国人対応についても学ぶことができる科目で、受講していてとても楽しいです。



### Q<sup>2</sup> なぜこの目標にしましたか？

自分の意見を言えるようになりたいと思ったからです。また、支援では被災者の力を引き出すことも大切と聞き、興味を持ちました。

雲井 絢子さん 日本赤十字広島看護大学 看護学部看護学科3年 / 広島県三次市出身



## Webで参加者の生の声を公開

参加者がプログラムの概要や感想を綴るブログを更新しています。ここでは紹介しきれなかった内容も掲載しているので、ぜひ一度ご覧ください。

下記URLまたは右記QRコードからアクセス！

TOMODACHI J&J DISASTER NURSING TRAINING PROGRAM

<https://tjdnt2015.wordpress.com/>



### 参加の目標

## 日米の災害医療を学び、日本に必要な視点を知る

### Q<sup>1</sup> 参加した理由は何ですか？

日本国内の災害対応だけでなく、米国の災害医療について学ぶ機会を魅力的に感じたからです。参加した勉強会で、私が思う日本の避難所とは異なる国外の避難所を知り、日本の災害医療をより高度にするには、海外のアイデアも柔軟に取り入れる必要があると感じました。プログラムで国内外の災害医療について幅広い知識と視野を得ることで、看護職としてすべきこと、そして現時点での課題について考えるきっかけになると思いました。

#### 学校でのわたし

学生メディカルラリーに参加し、災害看護に興味を持つようになりました。また、所属する救命サークルの勉強会を通して、災害への学びを深めています。



### Q<sup>2</sup> なぜこの目標にしましたか？

日本の災害看護には支援者支援が不足しているため、米国研修でヘルスケアを学んで、日本に還元できることを考えたいと思いました。

櫻井 あやのさん 東京医科歯科大学 医学部保健衛生学科4年 / 東京都日野市出身

### 参加の目標

## 協調性を身につけ、学びの還元ができるよう、深める

### Q<sup>1</sup> 参加した理由は何ですか？

小学5年生の時に宮城県で被災し、何もできなかったことが後悔となり、災害を避けて過ごしてきました。しかし、被災したからこそ、命の儚さや言葉の大切さを知ることができました。また、看護を学び、患者さんに感謝されることで、人の役に立つうれしさを実感。自身の経験を糧に、困難に直面する人々を支えたいと考え応募しました。東日本大震災を経験した方々から講義を受け、米国の災害医療体制を学べることに魅力を感じました。

#### 学校でのわたし

学校では、成人看護学領域で学べる内容の中に災害看護の講義がありました。そこで、災害現場で看護師が幅広く活躍できるということを知り、興味を持ちました。



### Q<sup>2</sup> なぜこの目標にしましたか？

学びを還元する際、相手に理解してもらうためにまずは自分が深く学ぶ必要があるので、意識して取り組みたいと思いました。

藤原 凜さん 宝塚大学 看護学部看護学科4年 / 宮城県塩釜市出身

### 参加の目標

## ①災害看護を知る ②完全燃焼

### Q<sup>1</sup> 参加した理由は何ですか？

私はこれまでに、中越地震や東日本大震災をはじめ、海外在住時にはテロや強盗に遭遇するなど、さまざまな災害や事故を経験しました。一瞬で日常が崩壊し、自分を含め周囲の生命が脅かされる恐怖と不安を覚えています。同時に災害時の人々のケアは、生きるための希望や勇気を与えてくれました。本プログラムでは、国際レベルの災害看護を学ぶことができ、自分の目的を実現するために必要なヒントが得られると思い、参加しました。

#### 学校でのわたし

私の興味のある科目は、「精神看護学」です。なぜなら、私は本プログラムの中で、メンタルヘルスと災害看護が密接な関係にあることを痛感したからです。



### Q<sup>2</sup> なぜこの目標にしましたか？

2年生でわからないことが多く、まずは知ることから始めたいと思ったからです。完全燃焼は、人生のコンセプトとして掲げています。

根岸 美砂さん 聖路加国際大学 看護学部2年 / 新潟県上越市出身

### 参加の目標

## 多角的な視点を身につける

### Q<sup>1</sup> 参加した理由は何ですか？

災害看護に関心のある他の学生とワークショップや意見交換を行い、多様な視点から学び直せると考えたからです。自分だけの学びでは不十分で、他者との交流を通して学びは深まると考えているため、授業や文献、教科書では得られない被災地での体験や支援などを聞き看護学研究へ活かしたいです。コロナ禍で留学も難しい中、アメリカの災害医療について学び、現地の医療従事者と意見交換できるのは貴重な体験であると考えています。

#### 学校でのわたし

最近特に興味深かったのは、災害時専門職連携の授業です。普段はあまり意識することのなかった行政の役割や業務の指揮系統などを考えるきっかけとなりました。

### Q<sup>2</sup> なぜこの目標にしましたか？

日本と文化が違うアメリカでの研修を通して、今まで気づかなかった視点を持てるようになったので、目標に掲げました。

吉見 萌々さん 千葉大学大学院 看護学研究科看護学専攻1年 / 東京都荒川区出身

# メンター紹介

メンターとは、学生たちが悩んだり、困ったりしたときに相談できる頼もしい存在。今年度は、災害看護のプロである2名のメンターが指導にあたっていただきました。



小原 真理子先生

清泉女学院大学  
看護学部 看護学研究科 教授

## PROFILE

日本赤十字武蔵野短期大学教授、日本赤十字看護大学教授、JICAインドネシア災害看護継続教育短期専門家などを経て、2018年4月より清泉女学院大学看護学部国際・災害看護学領域の教授に赴任。120時間の災害看護学教育課程を立ち上げ、2021年4月に開設された看護学研究科の災害看護学を担当する。また、2018年に日本災害看護学会が認証する「まちの減災ナース指導者」養成研修制度を立ち上げ、委員長として認証制度の制定と運用に取り組んでいる。

本プログラムにメンターとして参加し、充実した有意義な経験をさせていただきました。今年はコロナ禍のため、全課程オンラインによるLiveプログラムが展開されました。8名の参加学生は学部生2年生～4年生6名、院生2名の編成となり、災害看護の学習経験もさまざまでした。各プログラム後のリフレクションを通して、回を重ねるごとに災害看護の役割や活動内容についての学びが深まり、また画面を通しての関係性も確立していったことが伝わってきました。特にそれを感じたのが、最後の報告会に向けての準備から発表までの協働でした。さらに参加学生一人ひとりが取り組む個人プロジェクトでは、試行錯

誤しながら企画から発表までの全プロセスを通して周囲の人々と連携をとり、一定の成果がありました。本プログラムは、日米の災害看護の研修を通して、自分の意見を自ら考え語り、また自らの力で行動することなど、主体性を養いリーダーシップを育成することが目的として設定されており、一人ひとりが目標を達成できるよう、参加学生の研修支援体制がきめ細かく展開されておりました。メンターとして参加学生の成長を目に、耳にしながらの7か月でした。修了生が、この研修での学びを生かして、学習や仕事の場で災害看護の課題に向き合い取り組むことを期待しています。

今回のプログラムはすべてオンラインで行われ、時期も例年とは異なることから、学生にとってとても大変だったのではないかと思います。しかし、プログラムではオンラインで行うことの難しさに直面しましたが、それを乗り越えようとする中で自主性や連携、調整力が大変成長したのではないかと思います。医療の現場、特に災害医療においてはチーム医療が重要となります。チーム医療ではそれぞれ多職種との連携や調整、時にはリーダーシップも発揮する必要があります。このプログラムにはさまざまな学年の学生が参加されており、学生同士刺激し合ってお互いに成長で

きる環境が整っておりますし、リーダーシップに関してもとても成長したと感心することばかりでした。今は新型コロナウイルス感染症のことで持ちきりですが、日本は災害大国とも言われているように、これからも南海トラフ地震など大規模な災害が起こると予想されており、災害看護のニーズはより高まることだと思います。皆さんにはこの研修だけで満足せず、災害看護に関する興味、関心を持ち続け、日本のみならず世界的にも災害看護を牽引してくれることを期待しています。



前中 夕紀先生

宝塚大学  
看護学部 看護学科 助教

## PROFILE

2005年のJR福知山線脱線事故によって身近な方を亡くした経験から看護の道を目指す。臨床では看護師として働く傍ら大阪DMATとしても活動を行い、DMAT養成研修ではインストラクターも経験。臨床を離れた後は大阪大学大学院医学系研究科へ進学。大学院修了後は看護大学で教員の道へ進み、現在は宝塚大学成人看護学領域にて災害看護や救急看護に興味を持つ学生を育成している。また、国際緊急援助隊医療チームの一員となり現在も国際救援に関わり取り組んでいる。

# 3STEP プログラム紹介

事前研修・米国研修・事後研修の3つを通して、災害看護の知識だけでなく、プレゼンテーションスキルやリーダーシップ、グローバルな視野など、次世代を担うリーダーとして必要なことを学びます。ここからはそれぞれの研修について振り返り、学生たちが何を学んできたのかをご紹介します。



### 災害医療の今を知る

東北大学の江川新一先生を講師にお招きし、日本の災害医療と看護について、お話を伺いました。災害派遣医療チームであるDMATや、災害時の精神科医療を専門的に行うDPATの解説、東北大学病院の災害時の取り組みなど、さまざまなお話をお聞きしました。また、災害発生時のリスクを下げるためのアプローチも教えていただきました。



江川先生

### 震災時の病院の対応を学習

石巻赤十字病院の災害医療研修センターの災害看護課長である吉田みさんに、震災への対応についてお話を伺いました。日ごろから防災訓練を行っていても、実際に発生すると想定を超える事態が起こること、また普段から多職種と顔の見える関係づくりを行う重要性など、さまざまなことを教わりました。



吉田さん

### 被災経験を聞き、被災地を見る

公益社団法人3.11みらいサポートの藤間千尋さん、語り部の丹野佳朗さんに講義をしていただきました。丹野さんからは、震災発生時の薬剤師としての役割について伺いました。藤間さんからは、石巻でのボランティア団体による活動や、医療従事者との連携について教わりました。そして、最後に石巻の街をバーチャルで訪問しました。



丹野さん

藤間さん

### VR技術でトリアージを体感

日本医科大学多摩永山病院の久野将宗先生に、まずはSTART法と呼ばれるトリアージ方法について教えていただきました。次に日本体育大学の鈴木健介先生と、トリアージのVR動画を見ながら手順や判断の間違い探しを行い、知識を深めました。最後に久野先生に、今度はPAT法について、事例を交えながら講義をしていただきました。



鈴木先生



久野先生

## STEP 1 事前研修

今年度はオンラインで研修を実施し、3回にわたり災害看護の基礎を勉強しました。また、新型コロナウイルス感染症による現場の状況や、コロナ禍での災害対応も学びました。

### VOICE

#### 旭峻さん

長岡崇徳大学  
看護学部看護学科3年  
新潟県三条市出身

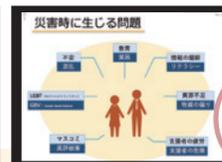


江川先生の講義を受けて、リスクを下げるための方法として、ハザードを小さくするだけでなく、「対応能力を大きくする」というものもあることに驚きました。また、災害医療・看護への取り組みが、これからの日本に非常に大切であることを学びました。災害多発国である日本では、行政だけでなく地域の防災に対する取り組みも大切だと感じました。

### コロナ禍の災害支援を討論

まずは増野先生から、新型コロナウイルス感染症の状況の推移と、世界への影響について教わりました。東京医科歯科大学病院災害テロ対策室の宮前繁さんからは、「CSCATTT」に基づいたコロナ対応を学習。最後にコロナ禍で起きた令和2年7月豪雨への支援について、特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパンで活動する高知県立大学大学院の看護学生である佐々木康介さんに教えていただきました。

宮前さん



増野先生

佐々木さん

### 先輩からアイデアを吸収

過去にこのプログラムに参加した、3期生の阿部美沙さんと嶋原菜穂さんからお話を伺いました。参加した理由をはじめ、プログラムの中で印象的だったことや個人プロジェクトの経験談、卒業後に取り組んでいることなどを教えてもらいました。また、グループに分かれて交流会も開催。より深い話を聞くことができました。

阿部さん

嶋原さん



### 被災者を傷つけない支援を学ぶ

BASIC Ph JAPANの岡田太陽さんから、被災者を傷つけないための支援の仕方について学びました。また、「BASIC-Ph」と呼ばれるストレス対処法を教わりました。これは、自分のストレス対処法が「信念・感情・社会的・想像力・認知・身体的」のどれに当てはまるかを客観視できる分析方法です。最後は、倫理的配慮に関するディスカッションも行いました。



岡田さん



Lindaさん

### COVID-19パンデミックが与える影響

## コロナ禍での米国の看護を知る

チルドレン・ナショナル・ヘルス・システムのLinda Talleyさんから、コロナ禍でアメリカの看護師が受けた影響を伺いました。この病院では平等な医療の提供に尽力しており、コロナ禍でもそれは変わっていません。Lindaさんは「コロナは多くの打撃を与えましたが、看護の役割や専門性を考えるための機会も与えてくれた」と語りました。

### 災害時におけるUS Military Nurse

## 米国軍の看護師の役割を学ぶ

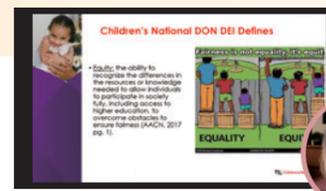
米国軍大学保健衛生センターのHeather Rivasplataさん、Cindy Robertsさんから、軍の看護師の役割について伺いました。アメリカでは災害看護に関する教育の場がないこと、災害看護と災害医療は同じものとして見られがちなことなど、日本と共通の問題があるとわかりました。災害時にはさまざまな職種が連携できるよう、教育が必要な点も教わりました。



Heatherさん



Cindyさん



Reneeさん

### 災害対策・計画におけるDEI

## 公平な健康を叶える要素を学習

「DEI」とは、Diversity(多様性)・Equity(公平性)・Inclusion(包括性)のこと。ジョージ・ワシントン大学のRenee Roberts Turnerさんに、アメリカの医療の歴史や人種差別、DEIについて伺いました。人種差別はヘルスケアに対しても影響を及ぼしていること、また、健康の公平性を改善するためにはDEIの明確な定義を理解する必要があることを学びました。

### コーディネーターが語る



### カリキュラムのポイント

Sarah Birchさん

DNP, APRN, CPNP-PC

メンタルケアやセルフケアの重要性は以前も指摘していましたが、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、より重要になりました。今年度は看護師が自らのストレス軽減に役立てられる、メンタルヘルスやレジリエンシーに関する方法を提供。また、多様性・公平性・包括性といった考慮事項を強調した内容も取り入れました。

## STEP 2 - 米国研修

今年度は現地に訪問できない代わりに、オンライン上で実施しました。新型コロナウイルス感染症についての内容も盛り込むなど、充実した研修となりました。



### VOICE

櫻井 あやのさん

東京医科歯科大学 医学部保健衛生学科4年 / 東京都日野市出身



Heather Rivasplataさん、Cindy Robertsさんから伺ったお話は、あまり馴染みのない“軍”というテーマで展開されました。しかし、複雑な要素に加えて特定のニーズが発生する災害に対応するには、医療者が適切な教育を受ける必要があるなど、日本にも通じる内容がありました。お話を聞く中で、国や背景は違えど、問題視されることや課題には同じものも多いのだと学びました。

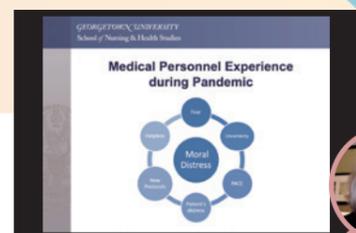
### 災害時の看護師の役割 / セルフケアとメンタルヘルス

## 4つの役割とセルフケアを知る

ジョージタウン大学のEdilma Yearwoodさんに、災害時の看護師の役割として、フェーズ毎に分析・計画・介入・評価の4項目があることを教わりました。また、国際看護協会が定めるコンピテンシー(優れた成果を発揮する行動特性)について学習。最後はセルフケアと心理的応急処置も学び、自分自身の健康状態をコントロールする方法を知りました。



Edilmaさん

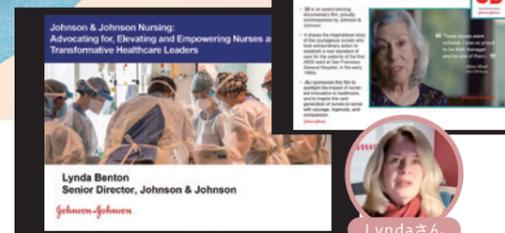


Sarahさん

### 災害管理における倫理

## 倫理規範の必要性を学ぶ

ジョージタウン大学のSarah Vittoneさんから、災害管理と災害時の看護師の倫理規範を学びました。倫理や道徳が不明瞭だと、非常時に行動を判断できないため、日頃から規範を明確にすることが大切だと教えていただきました。また、看護師自身のケアの必要性にも触れ、ストレスを抱える看護師をどのように支えるか考える機会になりました。



Lyndaさん

### ジョンソン・エンド・ジョンソンについて / 映画「5B」

## 看護師たちの勇気を映画で鑑賞

このプログラムの協賛企業であるジョンソン・エンド・ジョンソンが、125年以上にわたり行ってきた看護師への支援について、お話を伺いました。また「5B」という映画を鑑賞しました。これは、1980年代に世界で初めて開設されたエイズ病棟で働く看護師たちのドキュメンタリーです。映画を通して、看護に必要な倫理観や、人と接することの意味を学びました。

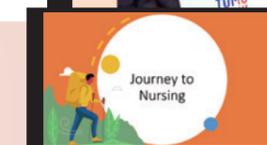
### アラムナイによる経験談

## 先輩から大切な心構えを教わる

2016年のプログラムに参加したChelsea Monteverdeさんに、過去の米国研修での学びを教えてくださいました。また、看護師の資格取得が目標ではなく、その先にある日々の仕事を大切に成長することが重要であるなど、Chelseaさんの看護師としての考えも伺いました。お話を聞く中で、参加者がどんな看護師になりたいか考えるきっかけになりました。



Chelseaさん



# STEP 3 - 事後研修

リーダーシップ研修と、事前研修や米国研修で学んだ内容をもとにした個人プロジェクトを実施。また、プログラムの締めくくりとして最終報告会を開催し、学びを共有しました。

## 増野 園恵先生によるリーダーシップ研修

### 自分を知る!



講義とワークショップを通して、リーダーシップや避難所の運営、看護の役割などについて学びました。

### ● 「リーダーシップとは何か」を理解

講義内では、一人ひとりが持つリーダーシップの形は異なり、それぞれのリーダーシップが発揮される場面もさまざまであると教えていただきました。また、事前に配布されていたチャートを参考にしながら、自分の特性について参加者一人ひとりが考えました。

### ● 机上で避難所設営をシミュレーション

まずは講義で避難所に関する基本事項を教わった後、チームに分かれて机上で避難所の設営を体験しました。人や物資はどこに配置するか、情報伝達用のホワイトボードはどこに置けば被災者全員から見やすいのかなど、さまざまなことを考慮する必要があると学びました。

### ● 保健師が現場で活動する様子を視聴

保健師による被災地での現場活動について、ビデオを見ながらディスカッション。患者側の気持ちに寄り添い耳を傾けたり、被災者に対して積極的に声をかけたりと、コミュニティに丁寧に加わる保健師の姿を見ながら、災害時における看護の役割を参加者同士で話し合いました。



増野 園恵先生

兵庫県立大学  
地域ケア開発研究所 所長/教授

兵庫県立大学看護学部教授として看護管理学領域の学部・大学院教育に従事。2016年より現職。他にも5大学による共同大学院「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」専任教員や、災害健康危機管理WHO協力センター長を務める。国内外での災害支援・調査に参加し、熊本地震、平成30年7月豪雨等では、中長期の支援活動と研究を行っている。

## 個人プロジェクト

理解力が異なる相手に伝える難しさを学びました



雲井 絢子さん

日本赤十字広島看護大学  
看護学部看護学科3年  
広島県三次市出身

## 避難所のトイレに関する知識を小学生に対してレクチャー

広島県三次市立川地小学校の5年生は、普段から授業の中で防災を学んでいます。災害の多い日本の今後を担う彼らに対して、イラストや写真を使い、クイズ形式で知識の再確認を行いました。また、避難所にもなる校舎に通う児童たちに、災害時でも清潔なトイレを維持してもらうため、避難所のトイレの現状と解決策を伝えました。参加した児童からは「クイズや写真があったから楽しみながら学べた」「なぜやらなければならないのかを教えてくださいわかった」といった感想が寄せられ、「災害への理解を深めてもらう」という目標を達成できました。



### プロジェクトに挑戦した感想

準備が不十分だったこともあり、改善点が多くありました。初めて小学生を対象にプレゼンしたため、伝え方や内容の難易度に悩みました。しかし、参加した児童たちの知りたいことに寄り添った内容にできたのはよかったです。自分が主体となって、企画を動かすことの大変さを学ぶことができた個人プロジェクトとなりました。

## 災害看護への興味を促す大学生向け講話会を開催

同じ大学に通う看護学科の2年生100名に対して、災害看護に興味を持ってもらい、防災意識を高めるための講話会を行いました。当日は他学年・卒業生も含め106名にご参加いただき、プログラムでの学びを共有。また、南海トラフ巨大地震が起きた場合の大阪市内やキャンパスの状況、防災行動についても伝えました。終了後のアンケートでは、多くの方から「有意義だった」とコメントをいただき、教員の方からも「後輩たちが被災経験やプログラムについて話を聞いてよかった」と声をかけていただきました。



### プロジェクトに挑戦した感想

講話会を通して気づいたのは、人前で話す楽しさと難しさです。プラスの感想に「やってよかった」と思う一方、知識量が違う相手に伝える難しさも痛感しました。次に、被災経験を語る意義。東日本大震災を経験した私が伝えていく重要性を再確認しました。最後は、周囲への感謝です。多くの人の力で実現できたことを忘れず、今後も成長したいと思いました。

あらゆることに気づけた経験でした



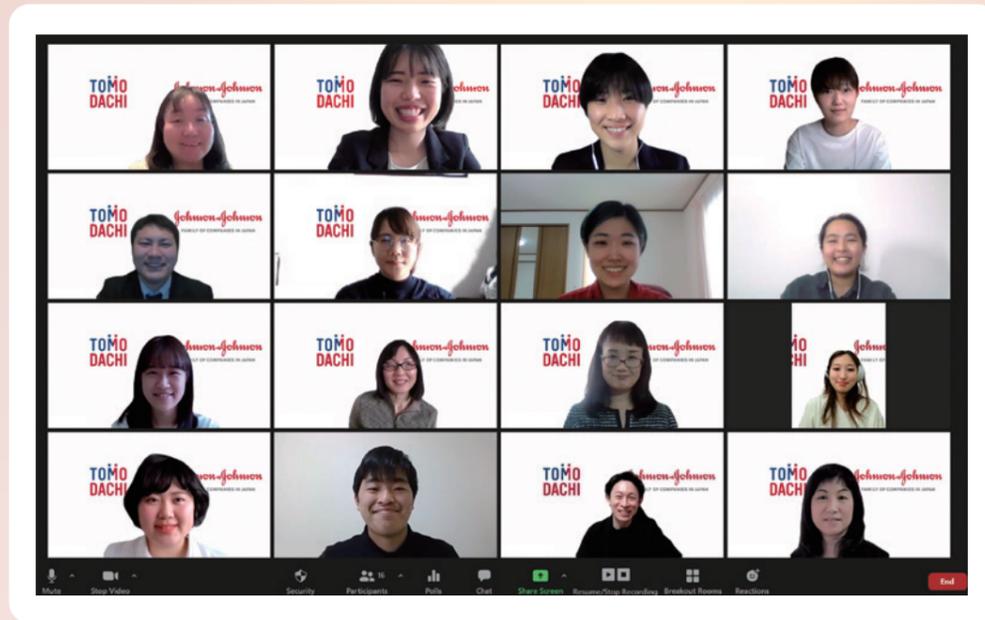
藤原 凜さん

宝塚大学  
看護学部看護学科4年  
宮城県塩釜市出身

## 最終報告会

プログラムの総まとめとして、学んできたことをウェビナー形式で発表しました。

また、メンターのパネルディスカッションでは、災害看護の未来に関する意見を交わしました。



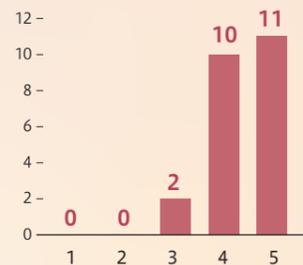
### 来場者アンケート

#### - Comment -

Q. 本プログラムについて以前からご存じでしたか？



Q. 本日の報告会に参加しての満足度をお聞かせください。  
1(全く満足でない) < 5(非常に満足)



受講生の皆さんの、支援者への支援という言葉が印象的でした。医療の質はもちろんのこと、精神的なサポートへの理解が深まりました。

東日本大震災の経験を若い人に伝える立場であることから、看護職を目指す人たちに何をどのように伝える必要があるのかを知ることができました。

こちらのプログラムは以前から存じあげていましたが、はじめて具体的な活動内容と参加者の声と成果を聴くことができ有意義でした。

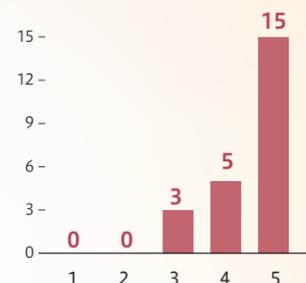
災害時の看護について、支援者自身のセルフケアや平常時からの備えが重要であることを学ぶことができた。

参加者の方々の志望動機が自分と近かったことやプログラムを終えての学びがたくさんあったとの感想を聞いて、参加への意欲が高まりました。

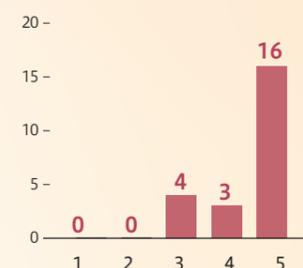
本日は、ありがとうございました。違う業界で、医療関係に興味を持っており、非常に勉強になりました。

私どもの大学の学生を参加させていただき、ありがとうございました。本日の発表を聞いて、彼女の成長を感じました。

Q. 災害医療・災害看護への興味・関心は高まりましたか？  
1(全く高まらなかった) < 5(非常に高まった)

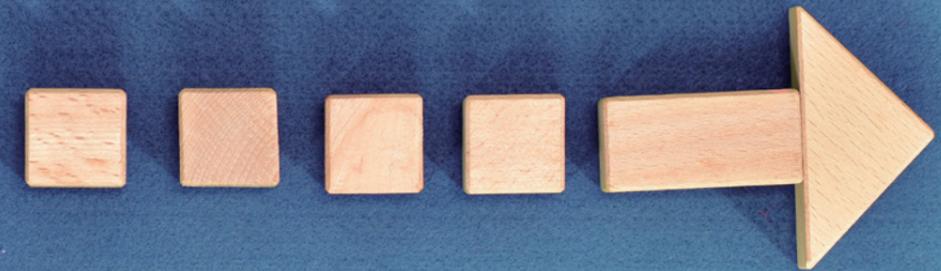


Q. 本プログラムへの興味・関心は高まりましたか？  
1(全く高まらなかった) < 5(非常に高まった)



## 修了後も 続く学び

参加学生にとって、プログラムの修了こそがスタートライン。プログラムで学んだことを活かして、日本の災害看護を発展させるためのリーダーとして成長すること。それが、私たちの願いです。ここからは、プログラムを修了したアラムナイのその後の活動についてご紹介します。



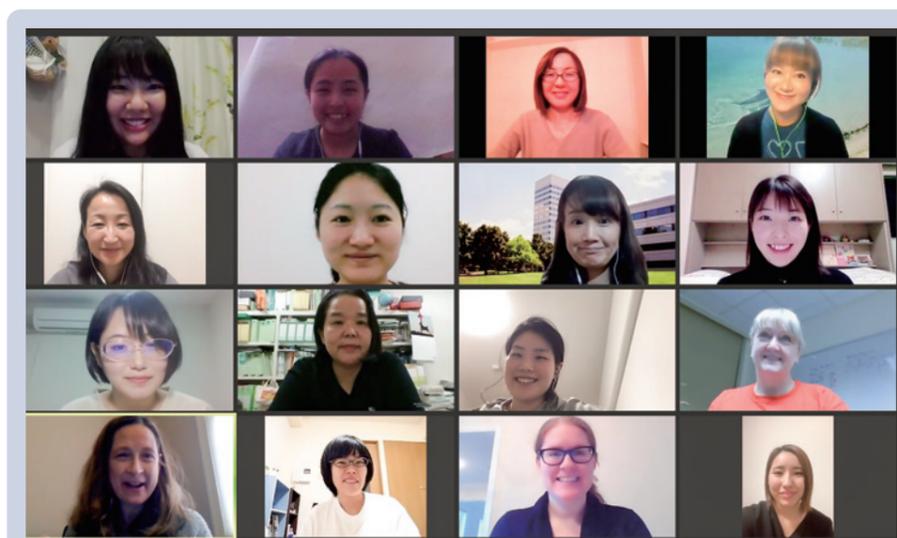


参加者のその後

## アラムナイとして引き続き活動

プログラムを修了しても、活動がなくなるわけではありません。

「アラムナイ」として、プログラムのサポートをしたり、仲間との交流を楽しんだり、取り組みを続けています。



### EVENT

## アメリカの看護師とアラムナイがオンラインで交流

2020年11月、本プログラムのアラムナイと関係者16名が参加するオンラインセッションが開催されました。このイベントには、チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システムの看護師3名も参加。アラムナイたちに「孤立を感じやすい時期だからこそ、楽しみを見つけてほしい」「自分をいたわることも忘れないで」「自分の経験を共有したり、他の人の経験を聞いたりすると、似た境遇の人がいるとわかる」とアドバイスを送りました。

※ この活動は、2020年度に行われたものです

## 本プログラムに参加したアラムナイにアンケートを実施

これまで本プログラムでさまざまなことを学んだアラムナイに対して、プログラムを通じて変化したこと、知識や経験が生かされた出来事、これからの目標について聞きました。

### 01 Question

プログラムに参加後、自分のどんなところに  
変化を感じますか。  
(複数回答可)



### 02 Question

仕事などの活動で、  
プログラムの経験や知識が  
生かされた出来事があれば  
教えてください。

- English userの妊婦の方を、入院から分娩、退院まで英語でアテンドできました。
- 災害用持出袋を作る企画が、卒業後も学校祭で実施されました。
- プログラムでの知識は、被災者支援業務や日常生活で生かされました。
- 産後の退院指導で、災害への備えについて少しずつ伝えました。
- 連日のコロナウイルス対応で、あの時の経験が心の支えになっています。
- コロナ禍での看護は災害に近く、知識を思い出しながら実践しています。

### 03 Question

今後の目標や活動予定を  
教えてください。

- 在宅看護領域での防災普及活動をしたと考えています。
- 安心して住める地域、安心してかかれる病院でありたいと思っています。
- まだ定まっていないため、今後見つけていきたいです。
- 防災や災害時の心のケアに看護の視点から関わりたいと考えています。
- にんさんじょくふ 被災地の妊産褥婦に災害に備える大切さを伝え、ケアを提供したいです。
- 防災士資格を取得して地域の防災活動に参加したいです。

提供元：公益財団法人 米日カウンシルージャパン TOMODACHIイニシアチブ 回答割合：全アラムナイの42%



## 関係者紹介

### お世話になった皆様

#### 江川 新一先生

東北大学 災害科学国際研究所  
災害医療国際協力学分野 教授

#### 増野 園恵先生

兵庫県立大学  
地域ケア開発研究所 所長／教授

#### 小松 恵先生

岩手医科大学  
看護学部 共通基盤看護学講座 特任講師

### 運営協力団体

## チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システム

チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システムは1870年の設立より、ワシントンD.C.を拠点に全米の子どもたちに医療ケアを提供しています。シェイク・ザード・キャンパス(高度小児医療)では、313床のベッドを有する急患治療病院のほか、3州を跨ぎ活躍する小児外傷センター、そして各種輸送手段を駆使した

救命救急搬送プログラムなどを有します。全米でもさまざまな企業や団体より最優良病院として多くの表彰や認定を受け、小児医療におけるその専門技術とイノベーション、また地域から国レベルでの権利擁護を通して子どもたちのために先立つ代弁者としての姿勢が支持されています。

STAFF		<b>Sarah Birch, DNP, APRN, CPNP-PC</b> Director, Advanced Practice Providers (Children's National Hospital) Assistant Professor of Pediatrics (The George Washington University School of Medicine and Health Sciences Center)		<b>Emily Dorosz, MSN, RN, CPN, CPEN</b> Clinical Program Coordinator EMS/Base Station Emergency Medicine & Trauma Center
	基本情報	所在地 111 Michigan Ave NW, Washington, DC 20010 U.S.A. 連絡先 +1-202-476-5000	設立 1870年 事業内容 小児専門総合病院	

## ローラシアン協会

ローラシアン協会は非営利団体として1990年に米国イリノイ州にて設立されました。さまざまな世代を対象とし、年間およそ総計2000人の参加者を誇る日米間の多種多様な派遣・招聘プログラム事業を行っています。2015年には70ヶ国を超える国からの米国留学を専門とする非営利教育団体PAX - Program of

Academic Exchangeに統合され、現在はPAX Laurasian Exchangeという団体名で、日々変化する世界を自身の肌で感じ、経験する機会を提供しております。日本事務局はローラシアン協会として運営しており、2016年度より本プログラムの運営事務局を担当しています。

STAFF		<b>日高 夢</b> プログラムディレクター		<b>平下 真衣</b> プログラムアシスタント
	基本情報	所在地 〒153-0064 東京都目黒区下目黒5-5-17 連絡先 03-3712-6176	設立 1990年 事業内容 日米間の派遣・招聘プログラムの運営	

## 協賛



ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ\*

### トータルヘルスケアカンパニーとして負うべき責任

私たちジョンソン・エンド・ジョンソンは、健康こそが豊かな人生の基盤であり、地域社会の繁栄と、発展を促す原動力であると考えています。130年を超える長きにわたり、私たちはすべての世代のライフステージに応じて、人々の健康を支えてきま

した。世界中の人々の健康に非常に大きな責任を負っているジョンソン・エンド・ジョンソンは、「我が信条 (Our Credo)」の理念にもとづき、ビジネスを実践し、社会貢献を通じて地域社会に対する責任を果たせるよう努めています。

### 東日本大震災からの復興支援について

当社は長期的な視点で、時間とともに変化する被災地のニーズを把握し、その時々が必要とされる支援に取り組んできました。その取り組みは、当社が提供する医療機器等の製品を被災地へ届けるための物流確保やがれきの撤去作業等から始まり、岩手県大槌町の仮設診療所建設、さらに福島県での子育てママと赤ちゃん支援プログラムや子どもの発育・発達プログラム等

にも及びます。震災後の復旧プロセスは終了しても、復興へのプロセスはまさに進行中。今、どのような支援が必要とされているのか、未来に向けてどのような取り組みができるのかを考え、今後も、ジョンソン・エンド・ジョンソンだからこそできる支援に取り組んでいきたいと考えています。

STAFF		<b>内田 菜穂子</b> Japan Community Impact(社会貢献委員会) マネジャー				
	基本情報	所在地 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 連絡先 03-4411-7200(メディカル カンパニー 代表)				
SUPPORT MEMBER		<b>坪井 圭子</b>		<b>井田 一宏</b>		<b>黒田 真梨子</b>
	基本情報	所在地 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 連絡先 03-4411-7200(メディカル カンパニー 代表)				

\* ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社(コンシューマー カンパニー、メディカル カンパニー、ビジョンケア カンパニー)、ヤンセンファーマ株式会社、エイムオー・ジャパン株式会社、株式会社ドクターシーラボで構成。

# まずは自分が well-being であること

看護の世界は、休みづらいと考えていました。しかし、この言葉を聞き、自分が健康でなければ、患者さんにより良い看護はできないと考え、自分の健康を大切にしたいと感じました。

—— 隈本 真有さん

看護をするためには、まずは自分の心身の健康が保たれていることが大切だ

講義でセルフケアや精神的援助の大切さを実感しました。何か起きたときは基本に立ち返って考える、つまり患者さんだけでなく自分自身を含む「人の安全」に立ち返り、自身の精神状態を確認することが必要なのだと感じました。

—— 櫻井 あやのさん

災害時支援では、支援が人を傷つけないよう注意しなくてはならない

こちら側が支援をしていると思っていなくても、相手に届かなければ逆効果だと学びました。被災者の心をさらに傷つけないよう、静かにケアをすることが相手に尊重するのだと感じました。

—— 根岸 美砂さん

平時にできないときは、有事の際に絶対できない

今年から病院で看護師として働いていますが、自身のことで精一杯になってしまっており、患者さんを守るのか不安に感じています。避難訓練に参加し、避難経路を確認することで、患者さんを守る医療者になれるよう努めます。

—— 藤原 凜さん

## 心に残った言葉たち

今回参加した8名の看護学生たちは、プログラムを通して、講師の方々からたくさんのことを教わりました。その中から、それぞれの心に最も強く残った言葉をご紹介します。

訓練でできないことは災害発生時では絶対にできない

災害医療研修センターの吉田さんの言葉です。災害はいつ起こるかわかりません。だからこそ私を含めたすべての人々が平時から災害に対して意識を持ち、備えることの重要性を改めて考えさせられました。

—— 旭 峻さん

ひとりよがりではなく、ニーズに合わせた支援が必要である

自分が助けたいと思うだけでは、支援しても現場の状況を乱すことになります。その地のニーズに合わせた支援をしなければ、被災地の復興を妨げる要因につながると知り自分の考え方が大きく変わりました。

—— 雲井 絢子さん

自分を大切にできない人は患者さんにより良いケアを行えない

以前コロナ病棟で働いている時に過度の疲労を抱えており、患者さんに良いケアができなかった経験がありました。災害時に備えて、普段から自分自身を整える必要があると考えようになりました。

—— 木田 千景さん

道德・倫理は考える枠組みを提供してくれる

医療の現場では、その判断で正しかったのか迷う場面が多々あります。その中で、倫理観という道標を持つことは、看護をするうえで必要だと共感しました。

—— 吉見 萌々さん

## TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム 2021

